

M E S S A G E

土木技術者の基本は リスクマネジメント能力

わが国で「危機管理」という言葉が、何の抵抗も無く使われるようになったのは、「阪神・淡路大震災(1995.1.17)」と「地下鉄サリン事件(1995.5.20)」の後になってからだ。それ以前にも「福井地震(1948.6.28)」や「伊勢湾台風(1959.9.26)」などの自然災害による危機はあった。世界が東西陣営に分かれて空前の軍備拡張競争をしていた冷戦時代には、偶発的なことが引き金となって世界が核戦争に突入する可能性すらあった。わが国は、このような核の脅威下にあったにも拘わらず、政治もメディアも国民も、この言葉を使うことを何故か避けて通った。

その6年後、米国のニューヨークとワシントンとで起きた「同時多発テロ(2001.9.11)」を契機として、危機管理という言葉は、わが国でも声高に使われるようになった。このような大きい変化が起きたのは何故だろう。第一は、大規模な震災や水災害の被災現場の映像がテレビによって茶の間に直接伝えられるようになったこと。第二は、テロという「人為災害」が身近に感じられるような時代に

なったこと。テロは恐怖(terror)という意味で、ある日突然に日常生活の場で起こることが多いから、意識して避けることができず、誰もが自分もその場にいたかもしれないと、恐怖を身近なものとして感ずるからだ。第三は、地球が活動期に入ったのか、このところ大地震や台風が頻発し、予測を超える被害をもたらすようになったこと。高度開発によってわれわれの住む社会が、知らず知らずのうちに脆弱になっており、インド洋津波(2004.12.26)やハリケーン・カトリーナ(2005.8.29)のように、予測を超えた深刻な被害が発生するようになった。

このように、「危機」を身近なものとして考えるようになったのだが、それでは危機を「管理する」とはどういうことなのであろうか。管理(Management)の語源を見ると、ラテン語の「Manus(手)」の意味である。要するに、管理するということは原理や原則を云々することではなく、行動あるのみなのである。

大地震のような危機は必ず起こり、人智によってそれを避けることはできないが、人間の努力によって被害を

最小限にすることはできる。したがって、危機管理の第一の要訣は、「危機を避ける」ことではなく、「危機に敢然と対処して被害を少なくする」ことである。危機から逃れるという選択肢はないのである。

自然災害であっても人為災害であっても、危機には「突然に」起こるという特性があるから、危機管理の第二の要訣は「咄嗟に対処する」ということである。危機はいつ起こるか分からないからといって、四六時中危機に備えているわけにはいかない。われわれが人間である限り、危機に際してパニックになることは避けられない。しかし、どれだけ早くパニックを克服して立ち上がり対処行動に移れるかは、われわれの日頃の努力如何にかかっている。

危機に際し躊躇せず咄嗟に行動できるようにしておかなければならない。そのためには、①どんな行動をするかを決めておく(行動マニュアル)、②行動に必要なシステム(規則・組織・資器材)を備えておく、③対処行動に慣れておく(訓練)が必要なのである。

「土木」という語源は、紀元前2世紀に書かれた中国の前漢時代の古典、「淮南子」の中で、「民が風雨や寒暑を避けられるよう、聖人(技術者)が土を築き、木を構えて家(都市のこと)を作った」という文章に由来していると伝えられている。

その土木技術は次のような五つの「使命」を持っているという。すなわち、①民の生命を守る使命(危機管理)、②民の生活を守る使命(基盤整備)、③民の生活を便利にする使命(施設建設)、④民の生活を快適にする使命(環境保護)、⑤民の宝を守る使命(文化財保護)である。このように、危機管理こそ土木技術者の基本的使命なのである。

また、そのためには次のような五つの「知恵」を持たなければならないという。すなわち、①民の安全を確保する知恵、②民を住まわせるための知恵、③民の資源を確保する知恵、④民を説得するための知恵、⑤民を育成し活用する知恵である。土木に携わる者の基本は、リスクマネジメントに関して、リーダーシップを発揮しなければならないことなのである。

志方俊之

SHIKATA Toshiyuki

■経歴:

1936年3月生まれ、石川県金沢市出身、防大(2期)卒、京都大学工学博士、米陸軍戦略大学留学、在米日本大使館防衛駐在官、北部方面総監などを歴任。94年3月退官、95年4月より帝京大学法学部教授、99年より東京都参与(災害対策担当)、安全保障・危機管理分野のアナリストとして活躍中。著書に「現代の軍事学入門」(PHP研究所)、「最新極東有事」(PHP研究所)、「フセイン殲滅後の戦争」(小学館)などがある。



撮影 小澤 篤